

ひかりのこ

3月園便り

聖ミエル幼稚園

2018年2月16日

月主題：希望

『神様はいつもそばにいてくださる』

私がまだ幼いころの話です。

私は、両親、兄、3人の妹という大家族の中で育ちました。いつも賑やかで、笑い声や、きょうだいげんかの泣き声、歌声、ピアノを弾く音、妹のバイオリンを練習するギーギーする音などたくさん音に囲まれて育ちました。

だからこそ、たまに誰もいない、一人でお留守番をしなければならないときがあると、その静けさがとても不気味でした。お父さんも、お母さんも帰ってこない、兄弟姉妹も帰ってこない、柱時計の振り子の「コチ、コチ、カチ、カチ」という音、時々なぜか二階からギシッ、ミシッという音がします。「お母さん、早く帰ってきて」ドキドキしながらお留守番をしたものでした。そんな時は、日曜学校のクリスマスのプレゼントでいただいた、お祈りをする子どもの陶器の像を箱から取り出して、同じように神様にお祈りしたものです。幼な心にも、神様とは絶対的な、何をもしのぐ大きな存在でした。

先日、M先生が、自分のクラスの年長のY君のお母さんから、最近Y君が家のトイレに一人行くのを「怖い」と思うようになったと、相談を受けました。それで、Y君としては「イエス様」の絵がトイレに貼ってあれば大丈夫かもしれない、と言っているで、M先生はY君と一緒に聖書の絵本から優しいイエス様の絵を探しました。それを、園長先生からお話をし渡してください、と頼まれました。

そこで、私はY君とお話をしました。「お祈りしたら大丈夫だと思ったけど、やっぱり怖かったんだ。イエス様の絵を張ったらいいかなあと思ったの。」とY君は言います。私は、M先生とY君で選んだにっこり笑っているイエス様の絵をY君に渡し、二人でお祈りをしました。「天のお父様、どうぞY君がイエス様の絵を見て、怖い気持ちがなくなりますように。」「天の神様、僕がトイレに怖くなく行けますように。」「アーメン」。

次の日、Y君に「どうだった？」と聞くと、「お母さんと、イエス様の絵のおかげで大丈夫だった。」とのこと。

「怖い」という感情は、とても高度な感情で、Y君の心の成長が感じられます。それとともに、キリスト教保育で育ったからこ

そ、こんな素敵な解決法を自分で考えられたのだと思います。これから大きくなるにつれ、「怖い」という感情や、他人や、自分自身のこと、「辛い」という感情が誰にでも出てくるはず。そんな時、なんとなくでも「神様がそばにいてくださる。」という思いがあれば、その壁も乗り越えていけるのではないのでしょうか。幼稚園を巣立っていく年長さんが、いつまでも神様の存在を心にとめていてくれれば、と願っています。

園長 渡部 良子

キリスト教保育

ともに生きる

皆既月食の日、月を見ようと深夜に窓を開けると、見えたのは月ではなく黒煙と火柱でした。幼稚園の近くで、生活困窮者の支援を行う共同住宅が全焼し、11名もの犠牲者を出す痛ましい出来事がありました。多くの方々とともに、私も大きなショックを受けました。それは、大勢が亡くなったというだけでなく、同じ地域の中で、困窮者が最低限の設備しかない条件のもと、身を寄せ合い、助け合って生活されていたことを、自分がほとんど知らなかったからです。

住宅の責任者が、テレビや新聞のインタビューで、苦しい胸の内を語っています。スプリングラーなど、安全を確保すればするほど、利用者の負担が増し、入居の条件が厳しくなるといいます。ぎりぎりの選択を迫られていた様子が伺え、とても彼らを責める気持にはなりません。

亡くなった方々の死を無駄にしないために、私たちはもう一度、共に生きるということの意味を考える必要があると思います。何かと自己責任が問われる風潮が強まっています。いつの間にか社会が人に冷たい方向に向かっているようにも感じます。しかし、そもそも自己責任でこの世に生まれてきた人が一人でもいるのでしょうか。行政がふさわしい支援制度を作ることはもちろんですが、私たちにも、立場を超えて支え合う心と、想像力が必要だと改めて考えさせられます。

「人が独りでいるのは良くない、
彼に合う助ける者を造ろう」(創世記2章)

チャプレン 司祭 下澤 昌